

第2節 河内の弥生時代後期土器に現れる2・3の現象

——溝へ廃棄された土器が語るもの——

1. はじめに

発掘調査を行っているとき、多量の土器が廃棄されていることがしばしば見られる。無論、日常生活雑器の廃棄は有史を通じて行われており、高度資本主義社会の現代に生きる我々はそれをメガレベルで排出し、大きな問題となっている。近年になってようやく、可燃物と不燃物を分類し、さらに不燃物のなかでもリサイクルのできるものと不可能なものを区別して、それぞれに異なった処理をするという方法を導入している。そこでは処理のスピードと環境への配慮が問題であり、これ以外には、他に意義付けも必要なく、システムティックに、速やかに事が成されている。

しかし、環境への配慮やリサイクルという観点からみれば、弥生時代の人々はすでにこうしたことを取り入れていたのではないだろうか。可燃物である木製品は燃やして暖をとったり、煮炊きに利用し、二酸化炭素を残して消滅する。不燃物である土器や石器等は埋め立て処分地の代わりに谷筋や土坑、溝に捨ててしまう。決定的に違うのは2千年後にそれが掘り出された時、弥生人が文字資料を持たなかったために、様々な意義付けがなされる事である。当然、今回もその例に漏れない。

弥生時代後期になると、溝や河川あるいは土坑から土器の多量出土が顕著になる。かつて森岡秀人氏はV様式の土器が多量に出土することから弥生時代後期の時間幅が長くなる可能性を示す材料となるのではないかと考えた。(註1)しかし、比較する時期が一連の社会のなかで、同じ形態と製作技法をもった土器を廃棄しているならこうした仮定も受け入れられるが、弥生時代中期と後期という大きな変革期をはさんでいては、物量が時間幅を決定するとは言いがたいのではないだろうか。そこで、あらためて弥生時代後期における土器の大量廃棄をとりあげ、廃棄の背景と当該期にみられる土器形態の変化について考えてみたい。

2. 土器の大量廃棄について

弥生時代後期から庄内式期初頭にかけて、溝などへ土器を大量投棄している状況が往々にして確認される。投棄の対象となる器種は壺・甕・高杯・鉢など日常に使用している土器のすべてが揃っており、手焙形土器が極少量含まれる。特徴としては破損していない完形品が多くを占めることである。穿孔や朱彩を施した土器は少量含まれるが、大半はそうした行為は行っていない。今回の調査では29-4調査区のS D6005にそうした傾向がうかがえる。南北にのびる溝の両岸に約195個体の土器がかたまっており、意図的に廃棄されたものと推定される。このような溝あるいは土坑への土器の廃棄は当該期に多くの事例をひろうことができる。

A. 弓削遺跡 溝(註2)

北西-南にのびる溝で、検出長約6.3m、幅4.4m、深さ0.8m以上である。埋土は大きく2層にわけられ、滞水あるいはゆるやかな流水状態であったとみられる。溝から約2mの地点で井戸が検出されており、集落に近接した溝であったと考えられる。図化された遺物は83点で、甕34%、壺30%、高杯19%、鉢13%、器台4%で、朱の付いた壺や穿孔された壺、甕、有孔鉢がある。ま

た、甕口縁から炭化米が溢れた状態で見ついている。弥生時代後期前半。

B. 弓削遺跡 第1次調査第3調査面 溝（註3）

南北方向の溝で、調査区外にのびる。検出長約20m、幅3.5～4m、深さ1.2～1.5mで、堆積層は大きく3層に分けられる。遺物は中層から密集した状態でコンテナ約150箱相当が出土している。時期は弥生時代後期前半。

C. 段上遺跡 溝100（註4）

溝の検出長は、2つに分割されている調査区を併せて40.8mを検出しており、未調査部分を含めて46.8m以上とみられる。幅は1.4～2.1mで、深さ0.15～0.3mを測る。土器は溝の中位に集中しており、次いで下位が多い。完形・破片を合わせて2292点の土器が出土しており、うち9点が非生駒西麓産である。穿孔した長頸壺、甕が含まれる。周辺で多くのピットと土坑が見ついているが、明確に同時期と判断できる遺構は見つっていない。弥生時代後期前半。

D. 恩智遺跡 S D13上部土器列群（註5）

東北－西南の溝で、検出長約3mで、幅2.8m、深さ1mである。この溝の南側肩部に沿って土器が列状に連なっていた。遺物はコンテナに約60箱あり、完形あるいは完形に近いものを含めて約160個体あった。構成比率は甕47%、壺23%、高杯15%、鉢12%、器台1%で、手焙形土器が1点出土している。調査では35条の溝が見ついているが、弥生時代後期に属するのは、この溝だけである。同時期の遺構は後述するS P03以外目立ったものはない。弥生時代後期後半。

E. 恩智遺跡 S P03（註6）

長径1.4m、深さ0.35mの土坑で、周囲1.8m四方の範囲で30cm大の礫が高さ20cm程度置かれている。遺物の出土状況は土器と礫が混在しており、投棄が繰り返して行われたと推定されている。遺物はコンテナ約53箱にのぼるが、完形になるものは少ない。また12点の焼成後穿孔の土器があり、他に朱を塗布したものも存在することから、祭祀に関連した土坑と考えられている。弥生時代後期。

F. 久宝寺遺跡 S D6005（本報告）

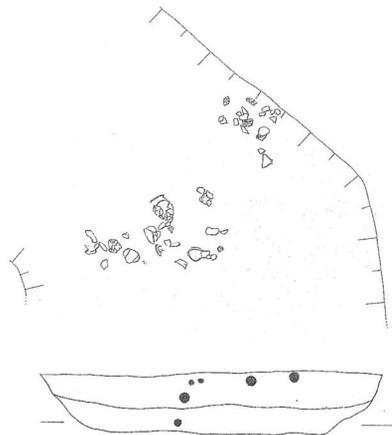
北西－南東に伸びる溝で、検出長19.5m、幅2.3～3.2m、深さ1.0mを測る。シルトと粗粒砂の互層堆積である。この溝の両岸で6か所の土器集積（S W6001～6）が確認された。一括性の高い土器群で、完形土器を多く含み195点を図化している。内訳は壺18%、甕54%、高杯13%、鉢13%、器台1%、手焙1%である。穿孔や朱を塗布したものはない。付近に同時期の遺構や明瞭な包含層はなく、居住域から離れた場所に位置しているとみられている。時期は弥生時代後期後半。

G. 成法寺遺跡 S D505（註7）

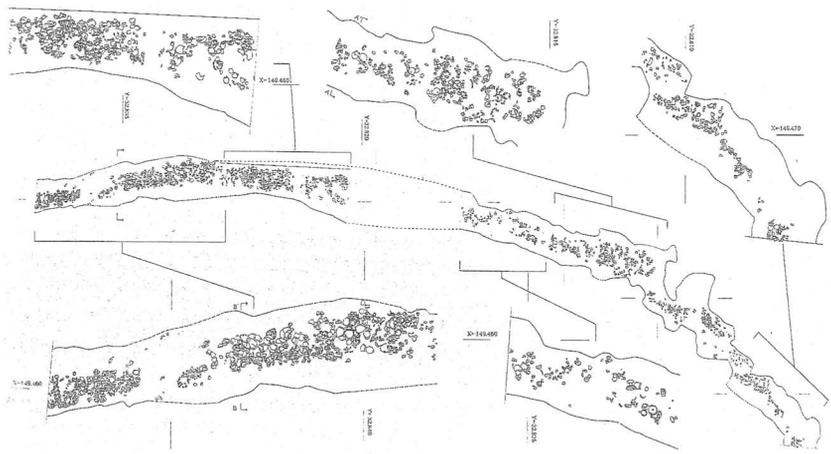
北西－南西の溝で調査区外にのびるが、長さ約4mを検出している。幅95～103cm、深さ約70cmで、70～80個体の土器が出土している。土器は最下層からは出土しておらず、溝が一定期間機能していた後に投棄されたようである。遺物は甕が殆ど占め、壺・鉢・高杯の順で、手焙形土器が1点含まれている。両岸では希薄ではあるが土坑やピットなどが見ついている。しかし、遺物はほとんど出土せず、溝と遺構との関連は明確ではない。時期は弥生時代末期。

H. 小阪合遺跡（95-104）S D13（註8）

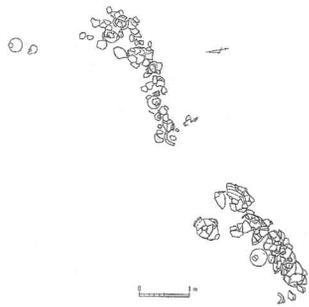
上記の成法寺S D505から東へ140mの地点で見ついている。北北東－南南西の溝で、検出長



A 弓削遺跡 溝



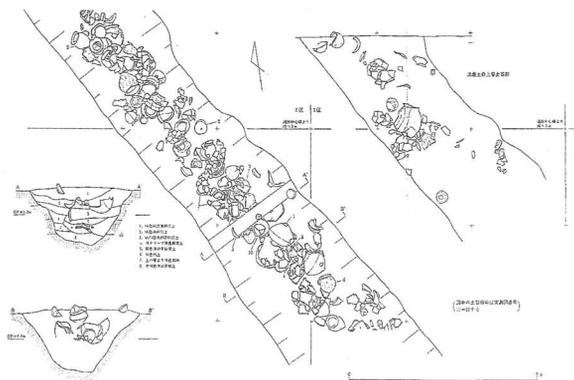
C 段上遺跡 溝100



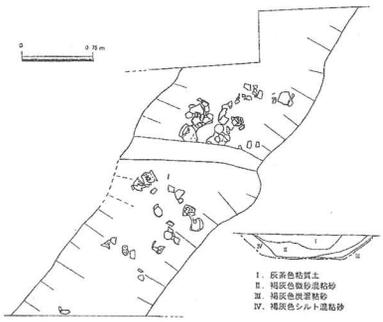
D 恩智遺跡SD13



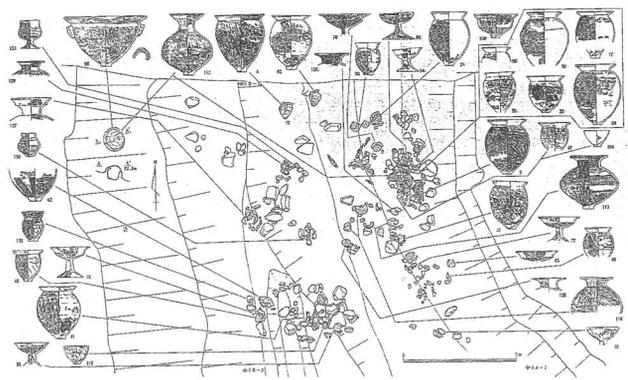
E 恩智遺跡SP03



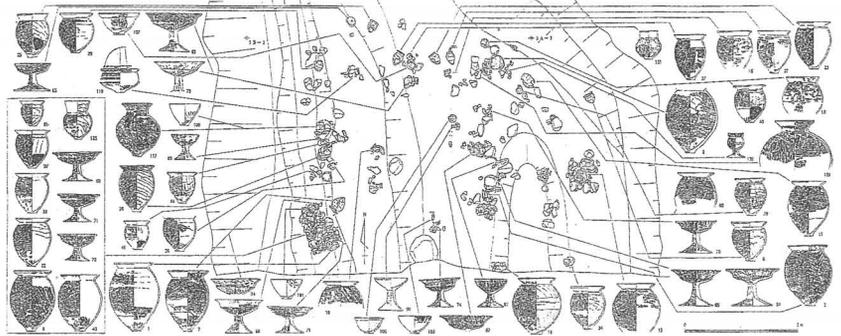
G 成法寺遺跡SD505



H 小阪合遺跡SD13



神山遺跡 溝3001



第1図 遺構内の土器多量廃棄の事例

4.1m、幅1.5m、深さ0.25mである。図化している遺物は18点で、そのうち甕が14点、壺が4点、他に鉢片が極少量出土している。穿孔や朱彩は行われていない。時期は弥生時代後期後半。

I. 神山遺跡 溝3001 (註9)

南北にのびる溝で、検出長は10mであるが、他の調査区との関係から規模は130m以上と推定されている。一部上層の遺構に削平されているが、上幅5.5～8m、下幅3～6m、深さ1.2mである。埋土は大きく上層と下層にわけられ、流水と滞水を繰り返していた状況を示している。遺物は一括投棄された状態で出土しており、完形あるいは完形に近い土器が約170点以上出土している。甕70点、高杯35点、壺36点、鉢30点、手焙形土器3点で、甕が全体の4割を占めている。甕や高杯と比較すると壺は破片だけのものが多い。また、穿孔や朱彩は行われていない。溝周辺に住居跡は見つかっていないが、段丘斜面から流れ落ちる水を防ぎ、集落内部を貫く取・排水溝と考えられている。時期は弥生時代後期末。

これらの遺構の特徴をまとめると、土器の廃棄が短時間に行われていること、すなわち一括性が高いということ、そして完形土器が高い割合を占めること等が遺物についてはあげることができる。遺構については、溝周辺に同時期の遺構の存在が希薄なこと、独立性を第一にあげることができる。さらに埋没後に近接した時期の遺構が継続して形成されていないこと、つまり断絶性ということである。

溝・土坑へ廃棄された土器	}	①土器の一括性 (短時間の廃棄・完形比率の高さ)
		②遺構の独立性 (同時期の遺構が傍で検出できない)
		③遺構の断絶性 (後続する遺構が構築されない)

廃棄された土器の特徴

3. 出土遺物と祭祀との関係

このような溝出土遺物については田代克己氏の一連の言及がある。(註10)田代氏は、瓜生堂遺跡と恩智遺跡の弥生時代中期の土坑や溝から多量の土器が出土することから、葬送儀礼に使用した穢れた土器を集落内に持ち込むことを忌避し、集落縁辺の土坑や溝に廃棄したものと考えた。

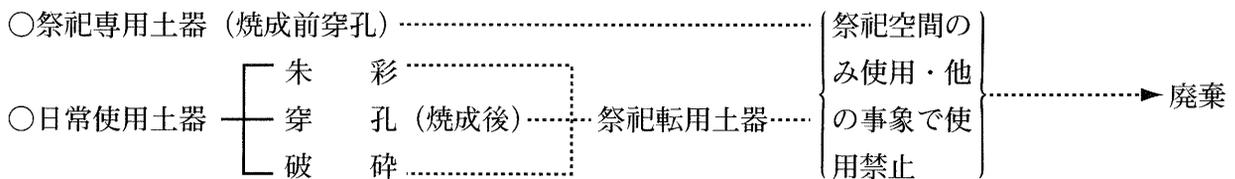
しかし、溝に廃棄された土器すべてが、葬送儀礼と関連付けられるであろうか。墓壇や周溝から出土する土器は明らかに葬送儀礼に関係したものと見える。しかし、墓域から離れている溝や土坑に廃棄された土器すべてが、葬送儀礼に伴うものと規定できるとは思われない。穢れの観念により土器のもつ機能の転換が行われるなら、穢れたものをわざわざ墳墓から居住域の近くに持ち帰りはしないだろう。

銅鐸や動物形・器財形木製品など様々な祭祀に係わる遺物は、祭祀が葬送だけではないことを物語っている。穀物の豊穰、天候や河川などの自然、人の誕生、戦の勝利、また墳墓だけではなく居住域での忌避など、人の能力や個だけから得られる成果を越えたもの、言い換えれば「超越者・神」への畏怖と祈りが祭祀の対象となりうる。こうした祭祀は、集落の中心や生産域の傍らで、あるいは個人の住居のそばで行われただろう。超越者・神への祈りは取引、あるいは契約であり、「交換財」なくしては祭祀は成立しない。穀物や木の実、獣や魚の肉、飲料水などが土器に盛られ、供物として並べられたと推定される。そして、葬送儀礼や豊穰を祈る祭祀など、様々な祭祀に使用された土器は、供物の一部となり、現象・機能の転換が図られて溝や土坑などに廃

棄されたものと考えられる。

祭祀に使用された土器かどうかの判断は、一般的に次の3点の現象を施したもので判断することができる。第1に朱の塗布。第2に穿孔であり、これには口縁部や底部等の「打ち欠き」を含めることができる。第3に土器そのものの形態を変換する破碎である。また、これらは1つの現象だけではなく、第1と第2あるいは第2と第3など、複合させている場合も見受けられる。この現象のうち穿孔を焼成前に行われたものがあり、祭祀専用土器と考えられる。祭祀専用土器以外に日常生活用土器がもつ機能の転換がはかられた壺、甕、鉢などを、ここでは祭祀転用土器と呼んでおく。

【祭 祀】



祭祀使用土器の設定概念図

だが、溝出土遺物にはこうした現象を伴わない土器が圧倒的多数を占める。それらは朱の塗布や穿孔をしておらず、祭祀転用土器とは異なる土器群で、破損によって廃棄されたとみられる土器とまったく破損していない完形の土器から成っている。つまり、溝に廃棄された土器は祭祀とは無関係なものが存在し、祭祀転用土器が大きく比重を占めるものではないことがわかる。

4. 土器廃棄の背景

土器が多量に出土するのは溝が顕著である。溝の全長が確認された例はなく、神山遺跡S D 3001は推定であるが130m以上とされているのが最長で、段上遺跡一溝100が46.8mとこれに次ぐ。幅は、最も狭い成法寺S D 505の1m前後から神山遺跡S D 3001の5～8mまでである。また深さは、小阪合遺跡S D 13の0.25mが最小で、弓削遺跡一溝の1.2～1.5mが最大である。このように溝の規模には一定の規律はなく、居住定員数の多少や溝の性格などに起因するものであろう。また削平など後世の影響も考えられる。

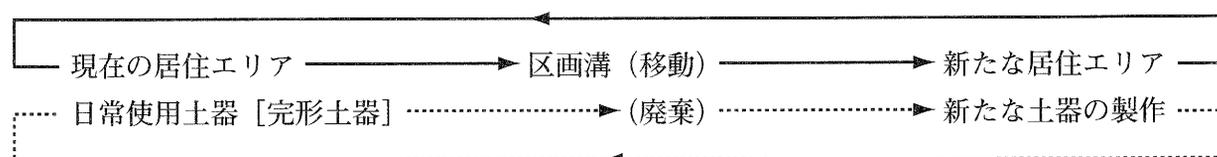
しかし、これら土器が廃棄された溝には「独立性」という共通項が認められることは前述したところである。久宝寺遺跡S D 6005の近辺では同時期の遺構はおろか包含層さえ見つかっていないが、南へ約200mの地点で、遺構が検出されている。成法寺遺跡や段上遺跡、小阪合遺跡でも同様の状況が確認されている。また、神山遺跡S D 3001でも同時期の住居跡は検出されておらず、調査担当者は後世に削平されたものと推定している。例外は弓削遺跡一溝で、そばで井戸が見つかっている。このような状況を呈しているため、溝と居住域の関係がもうひとつ掴みきれず、土器を廃棄した人々の姿が見えてこない。そのため溝本来の性格が明確にはなっていない。しかし、この溝のもつ独立性という特徴から性格を考えることが可能である。人の姿がないということは居住域から離れた場所、すなわち居住エリアの縁辺に溝が位置していたとみられ、居住エリアと他エリアを区画する溝と考えることができる。この場合の居住エリアとは住居域のみであるのか、あるいは墓域を含めたものであるかは現状では断言できない。そこで、ここでは生活圏と捉えて

おきたい。

溝は区画するラインとして意識されていたことは当然ではあるが、そのためだけに長大で、数mの幅を有する溝を掘削しないであろう。そこには生活圏における取・排水や他者の侵入を防ぐ機能が付加されていたものと考えられる。このような溝は集落が存続していくうえでは必要不可欠なものであり、生活圏内で使用していくためには大量の土器廃棄を行うことができない。廃棄が行われるときは、溝自身が使用されなくなった時と考えてよいだろう。

さらに、神山遺跡や久宝寺遺跡、弓削遺跡の土器投棄状況は短期間（一括性）で投棄したと考えられていることは、これら土器群の意味をとらえるうえで重要な示唆を与えてくれるものである。すなわち祭祀転用土器でもない完形土器を突然廃棄しなければならない状況が起こったことが想定されるのである。

集落における重要な機能をつかさどる溝に、大量の土器を一括あるいは短期間に廃棄しなければならない状況はどのような時に発生するかを想定したとき、集落の移動ということが考えられる。集落の移動については、田井中遺跡と弓削遺跡の集落を取り上げて概観したことがある。（註11）田井中と弓削遺跡の間に点々と残る弥生時代後期の遺構出土土器の時期が異なっていることから同一集団が、環濠集落崩壊後に集落の移動を繰り返していたものと推定した。この推定が妥当性をもつものであるのなら集落の移動に際して、その地点で使っていた土器を廃棄していたのではないかと考えられるのである。現在の引っ越しでも最も手間がかかるのが家財道具の運搬であり、荷車がないこの時代はなおさらである。このような観点から重量物である土器は貯蔵物の持ち運びなど必要最小限を除いて廃棄したものと推定できる。



弥生時代後期における集落移動と土器製作のサイクル概念図

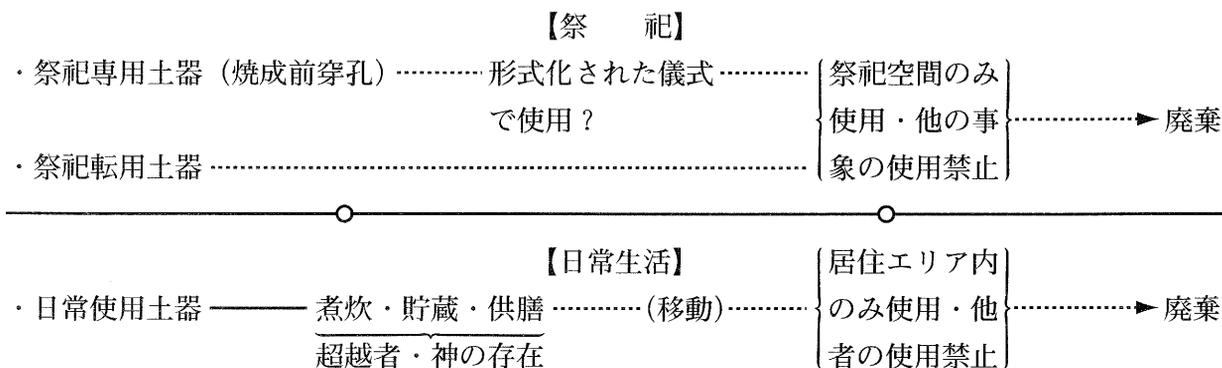
5. 溝や土坑への廃棄の意味

久宝寺遺跡 S D 6005 や小阪合遺跡 S D 315、神山遺跡 S D 3001 では祭祀転用土器は含まれていない。また、成法寺遺跡 S D 505 や弓削遺跡一溝などでも朱の塗布や穿孔した祭祀転用遺物は決して多くはない。しかし、それにもかかわらず完形土器の出土比率は高いことは第2節において述べた。神山遺跡 S D 3001 では、完形あるいはそれに近く、一個体と認識できる土器は358点中174点と約49%であり、非常に高い比率をほこる。また、久宝寺遺跡 S D 6005 でも、やはり完形土器あるいは一個体と認識できる土器は61%を占める。前節でみてきたように、集落の移動に伴って廃棄されたとしても多量の完形土器を溝へ廃棄する意義はどこにあるのだろうか。

本来は現状で置き捨てるのが最も簡単な廃棄方法といえようが、竪穴住居内やその周辺に大量の土器が放置されている状況は比較的少ない。焼失住居など突然の失火の場合には住居内に土器は残されることもあるが、こうした場合以外は土器が遺存している例はあまりない。むしろ土器の廃棄が、居住域移動に伴う通常の行為であったことを溝あるいは土坑から見つかった多量の土器は示唆している。もちろん、日常使用中に破損した土器の廃棄も同様に行われていたことは、

接合不能の土器の存在からうかがえる。

溝へ土器を廃棄する行為は、祭祀で使用した土器を廃棄する状況と似ている。祭祀という事象で使用された土器は、葬送儀礼や神との交歓による忌避によって、他の事象で再使用できないように仮器化あるいは廃棄し、供献土器として、また祭祀転用土器として忌避されたことはこれまで述べてきた。そこで重要なことは、土器の1)再使用を禁止すること、2)一定のエリアから持ち出させないことの2点である。それは朱彩や穿孔によって区別し、機能を損なう処置を施すことで再使用を拒み、また廃棄処分によって一定のエリアから持ち出さないようにしたのである。



このような祭祀に使用した土器に対する忌避行為は集落の移動に際しても行われていた可能性が、廃棄された土器から読み取れるのではないだろうか。それは民俗例における竈（へつい）の神や地鎮祭の地霊に代表されるように日常生活のすべての事象に超越者・神が関わっていると認める認識が芽生えていたのではないかと推定できる。もちろん、そのような民俗例を直接なぞらえるには、大きな時間の隔たりが存在しているとする批判はあろう。しかし、このように考えたとき日常生活で使用された土器は超越者・神の依代となり、祭祀専用土器・祭祀転用土器と似通った取扱いが成された理由を容易に導くことができる。廃棄された土器は朱彩や穿孔を施していないが、廃棄することによって他者の再使用を禁止でき、さらに区画溝に廃棄することによって生活空間というエリアを越えることはないのである。

6. 土器の変化について

これまで、溝へ土器を廃棄するという行為について述べてきた。次に廃棄された土器について気づいた点についてみていこう。これまで述べてきたように廃棄された土器は一括性の高いものである。廃棄という行為は弥生時代後期全般にわたっており、それぞれの土器群は各時空間の日常生活雑器の全体像を表しているものと思われ、土器の形態や器種構成の変化をとらえることができる。列挙すれば(1)小型化、(2)無文化、(3)甕の増加である。

- (1) 小型化 高さが30cm以下のものが主流となる。とくに後期後半以降においては顕著になる。
- (2) 無文化 簾状文や凹線文に代表される中期の華麗な装飾が影をひそめ、とくに甕はタタキやハケなど成形時の工程が残される。
- (3) 甕の増加 壺の出土比率が下がり、甕が増加する。

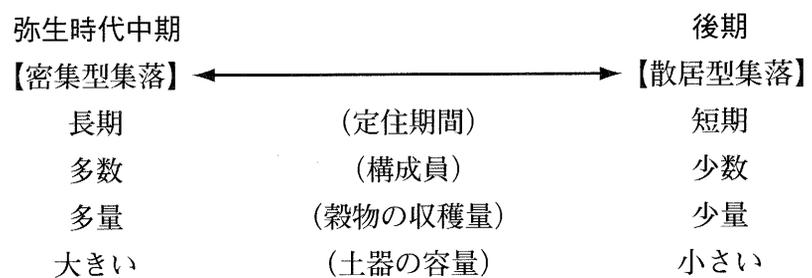
(1) 土器の小型化 丸山竜平氏は弥生時代後期末における稲粃貯蔵用壺の小型化は穀物を貯蔵する倉庫の成立によって導かれたものとした。そして、集落内に倉をもつ単位集団の成立は単位集団の変化を意味し、古墳の成立に関連付けた。(註12)しかし、稲粃の貯蔵に際しては総収穫量が一定ならば、袋での保存あるいは稲束のまま保存するなど貯蔵方法に変化がないかぎり、倉庫の有無に係わらず、貯蔵用土器は必要と考える。このため、貯蔵用壺と倉庫との相関関係は把握できないと思われる。都出比呂志氏は、貯蔵壺だけではなく、煮沸甕なども小型化することと器種構成の変化をも視野に入れ、「土器を使用する人間集団内の貯蔵や煮沸の単位の変化を暗示しており、(中略)生活様式の変貌を反映しているもの」と考えた。(註13)。

アプローチは異なっているが、両氏が説くように様々な土器の変化は社会に密接に関連したものである。中期から後期にかけて最も大きな変化は環濠集落に代表される密集型集落の解体あるいは縮小である。密集型集落の解体は弥生時代中期末葉から進行する。河内平野においては亀井、恩智などの集落が縮小していく。この集落の解体について寺沢薫氏は、上層指導者の居住域である特定区画が環濠内から出て居館として独立し、上層指導者層は民衆が環濠で防御することを嫌い、放棄させたのではないかと推定している。(註14)また、最近、秋山浩三氏は「後期水田では、自然地形を克服した完成度の高い水利システムの獲得によって、それまでと同じような調整と集住の必要性がなくなり、大型集落の解体を誘発する背景が出現する。」として、農業水利の発展から集落の解体を説いている。(註15)

密集型集落の解体・縮小は構成員の拡散を招き、多数の小集落である散居型集落の形成を促した。散居型集落では構成員の比率が減少することにより密集型集落よりも穀物の総収穫量は少なくなる。密集型集落では穀物の共同管理を行っていたと考えられており、貯蔵に際して大きな甕や壺が必要であったが、散居型集落では貯蔵可能な余剰物が減ったために大きな土器の必要性が薄れたものと推定される。

また、弥生時代後期は首長の支配が強固となる古墳時代に向けて新たな体制への枠作りが進行している時代であり、ヒエラルヒーの確立によって有力者層の権力の増大に伴い、軍事や使役(墳丘墓構築)による労働力の搾取、穀物の収奪システムが構築されつつあった時代と考えられる。(註16)労働力の供出による農業生産従事力の減少があったであろうし、収奪物の増加は余剰物の減少を導くという反比例の状態になっていったであろう。

以上のように散居型集落形成による総収穫量の減少と有力者層による収奪システムの確立が、集落の取り分となる穀物を目減りさせたことにより、土器の小型化が進んだものと考えられる。



密集型・散居型集落比較図

(2) 無文化 都出比呂志氏は土器の施文について集団規制との関係を想定し、共同体紐帯の変質と新たな共同体の再編がそれに影響を与えたものと考えている。(註17)同様な考え方として桑原久男氏は櫛描文型器種から非櫛描文器種への変化と習俗の変化を指摘している。(註18)

共同体の紐帯の変質は無文化の理由の一つとはなるが、畿内の土器への影響の大きさを考えると、それだけとは言いがたい。むしろ量産体制の確立（註19）による製作工程の省力化が無文化の第1の要因と考えたい。弥生時代中期末に位置づけられる西ノ辻N式併行期ではヘラミガキ調整のみの土器が散見され、すでに無文化が始まっているが、中期の形態を保っている。しかし、後期になると形態が大きく変化する。それは分割成形技法・タタキ技法等の省力化システムを導入した土器製作が、土器への意味付けを排除し、ツールとしての性格を全面に押し出した結果である。その意味において、都出氏が第四様式までの土器を原始土器と定義したことは肯定できる。鉢製作の延長上に壺や甕があることや高杯脚部の中実化・壺などの器壁が厚くなったこと、口縁端部形態の単純化などは製作工程の省力化システムが整ってきたことがうかがえるものである。当然、土器製作時間も短縮（乾燥を含めた製作日数）している。このような製作工程の省力化と無文化とは同一枠のなかでとらえることができる。すなわち、ツールとしての機能特化を命題とした土器作りは、付加価値を添付することなく、時間の短縮と装飾性の排除を目指したのである。

（3）甕の増加 後期における甕の増加についてはこれまで多く語られているところである。久宝寺遺跡S D6005は54%、恩智遺跡S D13は47%、神山遺跡では41%が甕の出土比率であり、段上遺跡溝100では口縁部による総個体数2292点のうち63%が甕という数字がでており、集落で使用される土器のうち甕が半数近くを占めていることがうかがえる。また小型の鉢の出土が顕著になり、古墳時代初頭になると高杯の数量が増加することになる。鉢の増加は、分割成形技法による甕の製作工程の一貫と考えることができよう。高杯については、木製高杯との関連を考えなければならないが、日常雑器製作において回転台を使用しなくなったことなどがその要因といえる。

それではこうした甕の出土比率の増大は何を意味するものであろう。溝から出土した土器は破損により廃棄されたものも含まれているが、大部分はこれまでみてきたように集落の移動などに伴って廃棄されたものであり、一括性の高いものであった。すなわち、集落全体で使用されていた土器の構成比率を表していると考えられるのである。そして、多量の甕は短い時間に使用されたものであって、長時間を有して堆積したものではない。しかし、これまでみてきたように集落は縮小傾向にあり、構成員が増加したとは考えられない。

構成員の人数に因らないものであるのなら、調理器具の使用方法の変化と食器構成の変化があげられる。調理器具の使用方法の変化については、壺に与えられていた役割が甕に移り変わったとする説がある。（註20）これは墳墓からの出土例において、壺に付着する煤の比率は低下し、甕の煤付着率は高くなっていることから、中期における壺の社会的役割が後期になって甕に置き変わったとするものである。

食器構成の変化は土器の小型化と関連がある。前述している余剰穀物の減少は、食料が乏しくなったことを意味し、調理用食器と供膳用食器を区別する必要性が希薄になったことが考えられる。すなわち、穀物を煮炊した甕をそのまま使用して食事を行っていたことが想定されるのである。調理兼供膳食器とする想定は、後期における甕の増加を説明することができる。

このように二つの理由が考えられるが、こうした複合した理由によって起こった現象と推察される。後期の壺は体部に対して口縁部が小さくなり、液体やその他を貯蔵するのに適した形態で

あり、中期に甕に担わされていた貯蔵という役割部分をも壺に移行したことが容易にみてとれる。また、甕は成形方法から鉢の延長線上にあり、内容物を多く入れるとこのできる鉢といってもよい形態を有していることは、様々な用途に適用するものであると考えられる。このように形態からみても甕は調理・貯蔵・供膳のすべての用途に用いることのできるものであったため、増加したと理解することができるのである。

7. まとめ

弥生時代後期において溝や土坑に大量に廃棄された遺構についてみてきた。その特徴は①土器の一括性、②遺構の独立性、③遺構の断絶性であることが確認された。出土する土器については祭祀に関連した祭祀専用土器や祭祀転用土器以外にも完形土器の出土が高い比率を占め、それらの土器は集落の移動の際に集落の縁辺にある溝に廃棄されたものと考えた。廃棄の背景には祭祀関連の土器が、穿孔・打ち欠きを行って祭祀以外の事象での使用忌避と一定エリア内で廃棄していたのと同様に、他者の利用の忌避と居住エリアからの持ち出しが禁止されていたものと推定した。しかし、それは中期から引きずっている祭祀と同じメカニズムのなかで行われていた行為に過ぎず、中期と後期における精神的な変化は認められない。その意味で、密集型集落である環濠集落が崩壊して居住形態の変化あるいはヒエラルヒーの確立が進行していようとも同じ文脈のなかで語られるべき時代であることがわかる。

溝に廃棄されていた土器には(1)小型化、(2)無文化、(3)甕の増加という3つの特徴がある。小型化は、中期の環濠集落などの密集型集落から後期の散居型集落への転換によって総収穫量が減少したことと、指導者層の権力増大に伴うヒエラルヒー形成による労働力の搾取や穀物収奪システムの構築が、余剰穀物の減少を促進したことによってもたらされたと考えた。無文化については土器製作工程の省力化が第1の原因と考え、ツールとしての機能特化を目指した土器作りが、装飾性の欠如をもたらしたものと推定する。さらに省力化は器種構成の整理を促し、調理方法や食器構成の変化が起り、甕の増加がもたらされたと考えた。

以上、弥生時代後期における溝から出土した土器について述べてきた。後期に発生した土器製作工程の省力化は精製土器である小型器台や小型壺、器壁の薄い庄内甕が出現するまで進行したものと考える。この省力化は畿内における土器製作技術の低下をもたらしたと推定している。それは庄内甕における内面ヘラケズリ技法が瀬戸内沿岸地域の技術を導入していると考えられることや小型器台脚部が古式のタイプでは山陰地域のX字脚と同様であることなど他地域の強い影響を受けていることからうかがえる。さらに庄内式期から布留式期において大型土器、特に複合口縁壺が讃岐から搬入されたことは河内における大型土器製作技術の欠落を示唆するものと考えられるが今回のテーマとは異なることからいずれ検討を行いたい。

参考文献

- (1) 森岡秀人 1985「弥生時代暦年代論をめぐる近畿第V様式の時間幅」『信濃』第37巻4号 信濃史学会
- (2) 消 斎 2000『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10 八尾市教育委員会
- (3) 西村公助 1985「弓削遺跡(第1次調査)」『昭和59年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- (4) 菅原章太・岩間俊之・横原美智子 2002『段上遺跡第12次発掘調査概要報告』東大阪市教育委員会

- (5) 田代克己・今村道雄・阿部幸一・曾我恭子他 1980『恩智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会
- (6) (5)と同じ
- (7) 亀島重則 1990『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会
- (8) 消 齋 1996「小阪合遺跡(95-104)」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
- (9) 上林史郎・山田基予美 1989『神山遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
- (10) 田代克己 1986「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『鳥越憲三郎博士古稀記念論文集』雄山閣
1993「一括して廃棄された土器」『日本文化史研究』第18号 帝塚山短期大学日本文化史学会
- (11) 消 齋 2000「河内平野の弥生後期集落の成立について－田井中遺跡と弓削・本郷遺跡をモデルとして－」
『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10 八尾市教育委員会
- (12) 丸山竜平 1977「弥生式土器の終焉－稲籾貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤－」『古代研究』10 元興寺
仏教民俗資料研究所
1977「弥生時代から古墳時代へ－近江における最古の土師器を求めて」『古代研究』12 元興寺
仏教民俗資料研究所
- (13) 都出比呂志 1982「畿内第五様式における土器の変革」『小林行雄博士古稀記念考古学論考』平凡社
- (14) 寺沢 薫 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- (15) 秋山浩三 2001「河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって－志紀・田井中両遺跡の弥生時代前期～中期
前葉水田の位置づけ」『志紀遺跡(その2.3.5.6)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- (16) 労働力の搾取については、水利事業や墳墓の築造に従事させられたと考えられる。庄内式期の例であるが纏
向遺跡において、多くの他地域産の土器が出土することから想定することができる。また、こうした労働に
従事する人々は自分の食料を持参した(させられた)可能性もある。穀物の収奪についても土器の移動から考
えることができる。ただし、発展段階であった有力者層が治めることのできる範囲が近隣に限られていた場
合、土器に特徴が無ければ見極めは難しいであろう。
- (17) (13)と同じ
- (18) 桑原久男 1989「畿内弥生土器の推移と画期」『史林』第72巻第1号 史学研究会
- (19) 田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性－近畿」『日本の考古学』Ⅲ弥生時代 河出書房
- (20) 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』史学篇 第26号 大阪大学文学部